



## デイサービス施設は 「生きる力を得るため」の場所

NPO 法人

ホッとスペース中原

本稿は、令和2年11月4日に関係者の協力の下、感染症対策に十分に配慮して取材しました。



◀ 昼食の時間には、職員が映画音楽やジャズなどの懐かしいメロディーをピアノで奏でています。音楽が流れる心地よい空間で、利用者は昼食をとっています



▲ 飲み物はたくさんのメニューを用意。自ら選択することを大切にしています



▲ 食事は利用者一人ひとりに合わせた食形態や量で提供。管理栄養士は毎食心を込めてメニューを考え、料理しています



▲ 介護職員や調理員、管理栄養士は、利用者といっしょに食事を楽しみながら、さりげなく各人の摂取状況等を確認し、ケアに活かします

**J** R武蔵中原駅から数分歩くと、4階建ての「ホッとスペース中原」があります。1階がデイサービス事業、3階と4階は多様な人々が暮らすシェアハウスになっています。牧師で介護福祉士でもある、NPO法人「ホッとスペース中原」代表の佐々木炎さんが、1998年に同じ区内にある教会をバリアフリー構造に改築してデイサービスを開設したのが始まりです。

「利用者が、ホッとできる」居場所で、自分の意思を表現できる自律性を大切にしています」と佐々木代表は話します。デイサービスの利用者は、1日の過ごし方を活動メニューから自由に選択できます。何もしたくないという気持ちも尊重されます。排泄や入浴は同性介護で、風呂は気兼ねなく入れる個室です。

昼食時間には、明るい日差しが差し込む1階に、プロのピアノストでもある介護職員が弾くピアノの軽やかな音色が流れます。このアイデアは佐々木代表が、新型コロナウイルスの感染防止対策の一



女学校時代は、弓道をやっていました。戦争中でしたから趣味も武道関係にならざるを得なかったわね。今は3階のシェアハウスに自分の部屋があって、そこからエレベーターで降りてデイに参加しています。お花とか、毎日、そのときの気持ちで好きなことができるのがいいですね。ここには保育園のお子さんたちや若い人など、いろいろな方が訪れてくれるのでおしゃべりができるし、飽きません。孫やひ孫が山梨にいて、年中電話して、遊びに来た時は本の読み聞かせをしてあげます。物事はいいように考えていくとどんどん楽しくなると思うわ。



▲昼食を終えると、利用者みんなで後片づけします。キッチンマットなどは数名で分担して、洗うことからふくことまでいねいに行います



▲水面に広がる模様や図柄を写し取るマーブリングを楽しむ利用者。活動のプログラムはバラエティー豊かに用意されています。午後の活動は前もって決めるのではなく、その時の気分で選ぶことができます

つとして考えたものでした。演奏が始まると、利用者は会話をやめて音楽に聴き入り、静かに食事します。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まった2020年の春、同法人は感染防止策を講じながら、利用者や家族の不安をとことん受け止めることに注力し、半日の利用など、それぞれの要望に柔軟に対応しました。すると入浴のみで通っていた利用者が「みんなと気持ちを持ち分かち合うためにここに来ていると気づいた」と通常の1日利用に変更。各利用者との信頼関係はさらに深まり、利用状況は感染拡大前にほぼ回復しました。

「デイサービスは単に栄養摂取や風呂に入ったりするためのものではありません。生きる力を得るための場。コロナ禍に陥ってあらためてそのことを認識しました。私たち職員はその意義と責任の重さを感じています」と佐々木代表。

ホッとスペース中原は、「コロナの痛み」からさまざまな気づきを得て進化し、地域に根付いた役割を担っていくことでしょう。



▲▶▲ 天気のいい日は希望者で歩行訓練に出かけます。取材当日は、近隣の神社で「菊花展」が開かれていたので、大勢が参加しました。途中、大通りに咲いていた色鮮やかな花に目をとめたり、談笑しながら神社に到着。カメラ持参の利用者が、見事に咲いた菊の花を撮影していました



▲ 感染予防の消毒は徹底して実施しています。散歩から帰った時も時間をかけて手を洗いました



## 職員 インタビュー



主任  
生活相談員  
**伊藤 愛作さん**

「誰かのために働きたい」と入職しました。当初は自分の気持ちを押し付けるケアになりがちでした。以前、ご利用者が亡くなって泣き続けていたら、あるご利用者が「あなたはみんなが死ぬたびにずっと泣いているの？」とそばにいてくださった。私が「してさしあげる」だけじゃなく、ご利用者も私に「与えてくださる存在」なのだと気づかされました。生きている意味がないと言っていた方が「生涯の友を得た」と笑顔を見せてくださるなど、うれしい瞬間がたくさんあります。



生活相談員  
**鈴木 真保さん**

私はいわゆる「ヤングケアラー」で祖父のおむつ替えをしていました。でも祖父は、孫にケアされることに尊厳を傷つけられており、私は祖父の残した宿題を解きたくて介護の道にすすみました。ご利用者とふれあうと“一人ひとり違って、みんないい”ことに気づかされます。祖父にはつらかった孫のケアでも、若い人によるケアがうれしい方も。その都度、ご利用者目線を探っていかなくてはと思います。また最期まで在宅で暮らせるように支える看取りケアにも力を入れたいです。



▲デイサービスの管理者とケアマネジャーを兼務する林義幸さんは「命の残り時間をコロナでひたすら自粛して過ごすのではなく、どう工夫すればご利用者の希望をかなえられるか、知恵を絞っています」と力を込めます

▼サイコロを転がしてキーワードを決める連想ゲームも人気です。「数字の1番は駅。駅と言えば？」と職員が聞けば、「浜松町。娘時代に通った」と利用者が思い出話を始めます



▼活動には茶道もあり、お点前を披露する利用者。背筋もキリッと伸びます

NPO 法人  
ホッとスペース中原

代表  
インタビュー

佐々木 炎さん



〒211-0041 神奈川県川崎市中原区下小田中1-19-21  
通所介護定員30名  
その他実施事業／訪問介護、居宅介護支援、ヘルパー派遣（子育て、障がい者支援）等

通常業務に加えて新型コロナウイルスの予防策も講じなければならず、ストレスが生じますが、同時にねぎらいや感謝の言葉がたくさん出るようになり、それが職員の力になっていると感じます。介護の現場は社会の縮図です。職員は対等に向き合ってくださいとご利用者と1対1で対話しながら、自分を振り返ることで「負の価値観」を手離し、「介護の誇り」を取り戻します。それを外へと広げていけば社会はきっと変容するはず。介護にも哲学が必要です。今、「リーダーを育てるリーダー」が広く求められていると思います。